



風は海から

令和4年1月31日
令和3年度
横浜市立西富岡小学校
学校だより No.10

自分自身で考えること

副校長 山田 正治

冬休み明けの登校前日に雪が降りました。1月7日(金)の今年の登校初日は、まだ積もっている雪を踏みしめながらの登校となりました。学校に着いた子どもたちは、まだ校庭一面に残る雪に目を輝かせていました。ここ横浜ではあまり見られない場面ですが、いかにも冬らしい光景に、例年より寒く感じられる今冬の一端が伺えました。

さて、冬と言えば駅伝シーズンです。私は陸上競技経験者ということもあり、休日は駅伝中継を見ることが多いです。今年の箱根駅伝は、みなさんご存知のように青山学院大学が2年ぶり6回目の優勝を往路復路ともに1着の完全優勝で飾りました。この青山学院大学で初優勝以来、選手以上にマスコミにとり上げられているのは、監督の原晋さんです。今では、監督の経歴は多くの場で紹介されていますので、おなじみでしょうが、原監督はご自身も元長距離ランナーでした。広島県立世羅高校時代、1500mでは県トップの実力者で県総体1位の成績を収めていました。ちなみに私は、原監督と同学年の広島県立某高等学校陸上部員(短距離走・跳躍)でしたので、監督の高校時代の走りを生で競技場で見たことがあります。

そのような県トップの素晴らしい実績でありながら、原監督は高校時代に経験した自分の走りへの取り組みを、今ではよいものとは思っていないそうです。その理由は、「やらされる練習」だったからというものでした。その思いから、大学での指導では、選手たちが常に自ら考えることを大切にしており、そのことが選手の自主性を伸ばし、昨今の好成績につながっているのではないかとコメントしています。指導者からの押し付け的な練習からの脱却とも言えるかもしれません。

このコメントを知り、大学と小学校という発達段階の違いはありますが、原監督の言葉には我々の指導にも通じるものが多いと感じました。小学校の学習においても「思考・判断」についての重要性は多く語られてきていますが、限られた学習時間の中で、いかに自ら考える活動を入れていくかという点は授業研究の中でも苦心している点の一つです。児童が自ら考えるための環境をいかに作っていくか、そして児童が「自ら考えたことによって『できた』、『わかった』」と実感できるような指導をいかに行うかを我々指導者は模索していかねばなりません。

さあ、今年度もいよいよゴールが近づいてきました。箱根駅伝で言えば復路の戸塚中継所を過ぎた第9区といったところでしょうか。子どもたちが最大限に力を発揮できるように、私たち教職員一同、伴走車からランナーに声をかける各大学の監督・コーチのように最大限の指導、支援をしていきたいと思えます。

